

人間の条件

山本 照幸

「人間の条件」という映画が、テレビで放映された。八月十五日から二十日まで、六夜連続だった。第一部純愛篇、第二部激怒篇、第三部望郷篇、第四部戦雲篇、第五部死の脱出篇、そして第六部曠野の彷徨篇である。

曾って、五味川純平の同名小説の映画化がなされた。第一部から四部までは、一九五九年（昭和三十四年）に、そして、第五部と第六部は、一九六一年（昭和三十六年）に公開された。その復刻版が今回だった。

一九五〇年代の後半、昭和三十年代の前半には、映画に魁けて、小説がもてはやされた。教員の間でも、職場で回し読みしたほどだった。そのあと、映画が高松で一挙上映されたことがある。総上映時間、九時間半。一日中、確と観た記憶がある。

八月は、殊に戦争や平和について考える月と思う。だから、この時期を選んだのか。山田洋次監督五十年記念ということで、同監督推薦の映画がテレビに放映されたということだが、監督は、家族愛というテーマで推されたようだ。何れにせよ、主人公の梶を通して、

戦争における人間性を描いた作品である。

一夜ごと、映画の後で、主役の仲代達矢が、当時を、しみじみと述懐する。例えば、

「軍隊という処は所詮、忍耐と持久力です」

兵役に関係無い仲代だが、何年もの間、小林正樹監督に本物まがいの演技指導を受け、梶に成り切った所為だろうか。

撮影は北海道。戦闘シーンは、陸上自衛隊の協力だったそうだ。

忍耐とか持久力というのは、軍隊とか戦時中だけでなく、日常生活において、特に老境の独り暮らしの人間には必要なことと思う。

半世紀前の映画には、梶の妻美千子役の新珠三千代はじめ、故人が沢山出ている。生きていても老人になっている人が、若く澆刺としている。原作を読み、映画を見た当時は、自分も若かった。

録画して、後からというのは、あまり見ないのではないか。やはり、その時本腰入れて見る方が、印象深いものになると思う。

（昭和二十四年卒）